

◆【随想】BISKRA号航海記(13)② 元機関長 新木繁雄

5月3日(木) ヒホン港停泊

朝、ダイバーが再び船底を点検した。長さ2.5メートル、幅60センチにわたり変形があり「10センチくらいの亀裂がある」という。LRの技師は2メートル×0.8メートル、厚さ10ミリの鉄板を船底から溶接し、中からは箱型を作って亀裂の上にかぶせ、溶接する方法を指示している。

午後4時、漏洩量を計測。時間当たり11トンだった。その後船底からプラスチックセメントを塗ったとっていたが、固まる前に漏水とともにタンク内に入ってきて、全く効果はなかった。それより亀裂個所を触ったことで水あかが落ち、漏水量が時間当たり15トンに増えてしまった。アルジェ駐在の小枝さんから状況問い合わせのテレックスが来て、返事を送った。

潤滑油メーカー、来船。フラッシング(海水で汚れた機関を潤滑油で洗うこと)について話し合う。フラッシングに使う特別な潤滑油はなく、使用している潤滑油を循環させるしかないそうだ。

電気技師の武村君は、すっかり本船がいやになったという。船底が接触した時、彼はブリッジで海図を見ていたらしい。エージェントに海図上で「接触したのはこのあたりだ」と説明したら、船長がいった位置と違って、船長は「武村はノーグッドマンだ」といったのを気にしているようだ。しかし船長がいった地点では絶対に船底接触は起こらない。

5月4日(金) ヒホン港停泊

ダイバーが船底の亀裂に木片を削って打ち込み、漏れを止めた。この作業を早くやってもらいたかった。漏れが止まったことで、主機8番シリンダーのクランクの滑動面を開放点検することになった。幸い、海水が漏れ始めてから全然機関を運転していなかったから、潤滑面には全く異常はなかった。不幸中の幸いだった。

船底からの水中溶接は、技術者もないし、用具もないので「ここではできない」という。ストアの予備品箱を開けてみて驚いた。工具類が全然ない。乗組員が全部部屋へ持ち込んでいるらしい。ペンチ、ドライバー、六角レンチ、プライヤー、モンキーなど一つもない。これでは何をやるにしても仕事にならない。一度なくなったものは二度と出てこない。

物が十分でない国では、どうしてこうも乗組員の心が貧しいのだろうか。機関長に話したら、「次のシンガポールで機関長とギャランティー(私)専用の工具を買うから、必要な物を書き出しておいてくれ」とっていた。

「海員だより」